

学位論文要約

文学研究と文学教育の交差研究

— 世界観認識の癒着から分離へ —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 学習開発学分野
カリキュラム開発領域

学生番号 D191110 氏名 李 勇華

論文要約

本博論は第一部「ポスト・ポストモダンの彷徨と到達」と第二部「文学研究と文学教育の交差研究」からなっている。第一部は第一章から第五章までであり、この五章に対しての纏めが第六章であり、第二部は第七章から第十一章までであり、この五章に対してのまとめが第十二章である。以下は、序章を含めて、各章についての要約である。

序章 本研究の目的・意義・方法

文学研究の主流は、20世紀の後半から流行していたポストモダンの文学理論を援用した後、かえって文学が不要であることを唱えている。一方、ポストモダンの文学理論に飽きて、あるいは最初からそれに対して不信感を抱えているような文学研究は、従来の文献学の領域に安住したままであった。ポストモダンの文学理論を援用する文学研究に比べて、文献学を駆使して行われた文学研究のほうは客観的に見えるという理由であり、科学研究が跋扈する現在ではむしろ重宝されるとされた。しかし、文献学の方法では文学の価値は引き出せないし、文学不要説を論駁することは難しい。

文学の力を考えるにあたって、われわれにとって問わなければならないのは、文学によって何が記述されたのかということではなく、文学の読む行為とは何かという原理的な問題である。

なによりも、文学教育にとって、教室のなかでの具体的な作品についての読みは核心問題なのである。それに照らしてみれば、これまでの、文学理論を援用していた文学研究では、読む行為の問題はあまり問い詰められなかったということがわかる。文学理論の有効性を検証するために、文学作品は道具として教えられている。文学教育からみると、それは本末転倒なことである。中高の文学教室では、まず文学理論を中心にして教えることが不可能である。

とはいえ、文学教育にとって、文学理論はそのまま否定されるべきだというわけではない。具体的な作品の読みを抽象化した結晶が理論となりうる。それが文学の理論である。文学作品の読む行為に暗黙に含意されているのは「文学」についての定義である。

そのために、本研究は以下の三つの目的を掲げることにする。

- (1) ポストモダン以後のポスト・ポストモダン思想を明らかにすること
 - (2) これまでのポストモダン思想の受容における問題点を洗い出すこと
 - (3) 具体的な作品の読みを通してポスト・ポストモダン思想に拠る文学教育を示すこと
- 上記の目的を掲げる本研究は次のような二つの意義があると思われる。

- (1) 文学研究にとって、文学研究を一つの学問として成り立たせるには、結局「文学」についての定義を避けることができないということ、本研究は文学教育研究の立

場から提起することである。

(2) 文学教育にとって、「文学」の役割はわれわれの世界観認識を解釈することにある。

その点において、絵画、音楽などの芸術も同じである。本研究は「文学」のため、われわれの人生が造り変えられつつあることをしめすことである。

本研究はつぎのような方法を考えている。

(1) 前半では、第三項理論に照らしながら、バルトⅢ期、ベンヤミンのアウラ、アーレントの公共性を分析して、ポスト・ポストモダン思想の全体像について展望する。

(2) 後半では、主に中高の文学教材に使われた〈近代小説〉を読む。ポスト・ポストモダン思想に求められる読み方に基づいて読むこととそのように読まないこととの相違をあらわにし、新しい文学教育を展望してみたい。

第一章 世界観認識における癒着から分離へ

この章では、まず、ポストモダンについて、(再)定義してみる。ポストモダンとは唯物反映論と田中実によって首唱されている第三項理論という二種類の世界観認識の癒着である、ということである。この(再)定義を前提にして、ロラン・バルトのテクスト概念を検討することを通して、バルト思想におけるポストモダンを明らかにする。フランスのツヴェタン・トドロフと日本の丹藤博文はバルトをとらえそこなったためポストモダンを通過できなかったことを指摘する。彼らは各自の立場から現在の文学教育に対して批判したが、その批判は「文学」のためになるかどうか、再考されるべきである。最後に、ポストモダンにある二種類の世界観認識を分離し、ポスト・ポストモダン思想に求められる読み方で魯迅の『故郷』に描かれた少年閩土の世界を読むことを通して、教育の原理を問いながら、これからの文学研究と文学教育の交差研究のしかるべき姿を示す。

第二章 第三項理論とロラン・バルトⅢ期—『恋愛のディスクール・断章』を読む—

前章で論じたように、「作者の死」と「作品からテクストへ」を中心とするバルトⅡ期に相異なる二種類の世界観認識が混在している。バルトⅡ期以後、バルト思想は明確に第三項理論のような世界観認識に傾斜して展開された。それについて、この章では、具体的に『恋愛のディスクール・断章』を取り上げて分析してみたい。

「カル・スタ」に影響を受けて、バルトⅢ期、とくに『明るい部屋』についての研究が多く見られるが、しかし、それによってはバルトの思想展開の必然性を解明することができない。日本では、『明るい部屋』に比べて、バルトの『恋愛のディスクール・断章』はあまり研究されていない。僅かであるが最近、これまでのバルト研究・受容を相対化

するために書かれた『恋愛のディスクール・断章』論がある。しかし、これらの論考は依然としてバルト思想の核心に辿り着けなかった。

そのために、本論では先行研究整理した上で、第三項理論に照らして、恋する人にとっての想像界（ラカンの用語）、恋愛主体と恋愛の対象の了解不能の《他者》（田中実の用語）関係という二点に絞って論じてみたい。究極の愛とは何か、バルトの『恋愛のディスクール・断章』には、それに対しての明確な答えがある。

第三章 写真論におけるベンヤミンとバルトの比較—「カメラ・オブスクーラ」から「カメラ・ルシダ」へ

これまでの文学理論書に紹介された思想家のなかに、ロラン・バルトのほかに、たとえばヴァルター・ベンヤミンの思想も第三項理論のような世界観認識を抜きにしては理解できない。結論を先走って言うと、むしろベンヤミンのほうは最初から第三項理論のような世界観認識を思想の出発点として、それに基づいて十七世紀のドイツの悲哀劇を再評価して「文学」を定義したが、その途中で第三項理論からそれて、唯物反映論に傾斜して思想を展開していたと見える。大雑把に言うと、思想発展において、ベンヤミンの出発点はバルトの到達点である。

ベンヤミンの思想は、どのように第三項理論のような世界観認識から出発したのか、またどのようにそれに基づいて「文学」を定義したのかということについては次章に委ねることにするが、この章では、まず両者の写真論について比較してみたい。写真はベンヤミンの言っている「カメラ・オブスクーラ」（「暗い部屋」）なのか、それともバルトの言っている「カメラ・ルシダ」（「明るい部屋」）なのか。これまでの数多の先行研究は世界観認識に対しての自意識が欠如しているので、この極めて基本的な問いとの対峙はできなかった。

ベンヤミンの思想にバルトを魅了させたところもあれば、沈黙させたところもある。両者の思想は対立するゆえに比較されるべきであろう。本論では、これから明らかにされるが、写真論における両者の対立に隠されているのは第三項理論のような世界観認識における両者の一致である。したがって、このような比較によって、これまで文学研究の理論受容におおまかに使われていた構造主義からポスト構造主義への図式を相対化することができるのみならず、そもそもポストモダンにどのようなポスト・ポストモダンが内包されているのかということも解明することも可能である。

第四章 第三項理論と20年代のベンヤミン思想—「認識批判的序説」を読む—

二〇世紀三十年代のベンヤミンより、二十年代のベンヤミンのほうは第三項理論との間に共同性が見られるということが考えられる。それについて、本章では、具体的に『ド

『イツ悲哀劇起源』の序章として書かれた「認識批判的序説」を通して分析してみたい。

ベンヤミンの思想展開において、第三項理論のような世界観認識はその通奏低音といっても差し支えないが、『一方通行』以後、明らかに唯物反映論に傾斜して思想を展開していた時期もある。それは、ラトヴィアのリガ出身、プロレタリア演劇の実践に取り組んでいるアーシャ・ラツィスという女性との出会い、アドルノとの出会いなどと無関係ではありえない。特に、金銭に苦しんでいるベンヤミンは、原稿料に頼って日々の生活を維持するために、最初から唯物論を掲げていたアドルノの意見に答えられるように、くりかえし「複製技術時代の芸術作品」などを書き直したということは周知の通りである。唯物反映論に傾斜しつつあったとはいえ、ベンヤミンの20年代思想に秘められている第三項理論のような世界観認識は消えたわけではなく、ベンヤミンの死ぬ直前、ファシズムに抵抗できなかったドイツ社会民主主義や共産主義国家ソ連に対しての失望のなかで書かれたと思われる「歴史の概念について」(「歴史哲学テーゼ」)に入って、そのトーンがひとしお強く感じられるのは筆者だけではないであろう。

今現在、謎の満ちているベンヤミンの思想を解き明かすために、ベンヤミンの思想における二種類の世界観認識問題をクリアするのはもっとも喫緊な課題であろう。このようなクリアができれば、ベンヤミンは前章で比較対象とされたバルトだけではなく、たとえば、ハンナ・アーレントなどの思想家との接点がどこにあるのかということがおのずから分かるかもしれない。

第五章 ハンナ・アーレントの公共性とポスト・ポストモダン—ジャック・デリダとロラン・バルトを視野にして—

二十世紀の六〇年代以後、文学研究に多大な影響を与えたロラン・バルトは生涯の間かかって文学について定義をした。これまでの私の研究によると、バルトにおいて、文学についての定義は唯物反映論から第三項理論のような世界観認識への転換にかかわっている。言い換えれば、このような世界観認識における転換がなければ、バルトは通常に理解されている文学から離れたままである。定義される対象こそ違え、政治について定義をしたアーレントもバルトと同じ問題に遭遇したのではないかと考えなくてはならなかった。先走って言うと、アーレントにおいては、バルトの思想発展にはっきりと見られるように、唯物反映論からそれと異なる世界観認識への転換はなかったが、この二種類の世界観認識が彼女の政治についての定義の仕方に併存しているということがある。その手がかりとして考えられるのは、『人間の条件』の第六章のデカルト論である。アーレントの遺稿『精神の生活』のなかで、デカルトがあらためて取り上げ論じられた。「政治」についての定義を基礎づけるものを探すために、アーレントは繰り返し近代哲学の

始まりとされるデカルトの『省察』について論じたのではないか。そして、アーレントにとってデカルトのどこが重要なのか、デリダのフーコー批判を見るとはっきりとわかる。

本章では、デリダとバルトの思想に照らして、アーレントの公共性を明らかにしてみたい。本論の前半では、アーレントを読むしかるべき方向を示すために、デリダのフーコー批判を取り上げてみたい。アーレントの公共性に解き明かされたのは新しい世界観認識にかかわるならば、『人間の条件』のなかで、どのような内容がそれを例証できるのか、という問題について、本論の後半では、バルトと接点があると感じられる『人間の条件』の第二四節、第二五節から具体的な内容を選んで分析してみる。

なお、本章では『人間の条件』という書名を使うが、具体的な引用は志水速雄訳の『人間の条件』ではなく、森一郎訳の『活動的生』に準ずる。『人間の条件』に比べて、『活動的生』のほうは「分量が増えただけでなく、もっともと屈折度の高い文体がいっそう陰影を増し、「手すりなき思考」の跡を留めている」と森一郎は述べたが、「手すりなき思考」とは何か、本論では唯物反映論と異なる世界観認識の角度からそれに対しての照射を試みたい。

第六章（まとめ1）ポスト・ポストモダン「思想」に交差している文学研究と文学教育—ソシュールの世界観認識問題および座談会「文学と教育における公共性の問題-文学教育の根拠」についての検討—

これまでの文学研究における理論の受容から伺えるように、多くの文学研究では、理論と徹底的に対峙されず、文学が読めないことを紛らわすために理論が飾りとして使われているのではないか。この点においては、筆者も例に漏れない。

それに対して、文学教室のなかでは、生徒たちはいきなり読みの対象にぶつかることが考えられる。生徒にとって、個人の好き嫌いに有無を言わせることができないほど、まず、読まなければならない。生徒の読む行為がなければ、文学教室は成り立たないからである。そこで、当然ながら、生徒に好まれる内容と生徒に嫌われる内容が現れる。それらの内容は、それぞれの生徒の粉飾のない自己で、大事にされるべきであろう。文学作品を読む時、ランダムに読まない限り（文化研究では、作品の文脈がずたずたにされ、語られた内容の断片が読まれている）、だいたい、語り手の語りにそって読むしかできない。語り手の語りにそって読んでいるので、語る主体のことが却って語られる内容のように読まれる対象となりにくい。しかし、語る主体の可能性と限界を読むと読まない、文学作品の価値が引き出せるかどうかの分水嶺である。生徒に語る主体の可能性と限界を読ませることは、語り手はフランス語できるとか（『羅生門』の場合）のような知識を身につけるさせるためのことではなく、生徒に作品を読むことは自分のこと読む、自分のこと読むことは、作品を読むということを理解させるためである。生徒に読まれ

る内容が確実に生徒自身のものになるには、語り手の可能と限界という位相をかいくぐることが必要である。その位相との関係のなかで、生徒に読まれる内容が自分のものになるのみならず、読まれる内容における変化が感じられる。その変化は、いわば生徒自身の成長である。したがって、作品を読む際、生徒自身の好き嫌いは問題ではなく、その好き嫌いと言語の主体の位相との関係を探らせることが問題である。そのような関係を抜きにして読む限り、生徒はせつかく気づいた自己を自分の手から逃してしまう可能性がある。そうすると、嫌な内容を捨てて、好きな内容に飛びつくという読む習慣を止めることができない。好きなことであれ、嫌なことであれ、それらが対象化されてから、生徒の自身のものになれる。対象化がなければ、この時は好きだったが、次の時に、好きであるかどうかは分からない。肝腎なのは、対象化は、読まれる内容の間ではなく、読まれる内容（語られた内容）と言語の主体の間で行なわれるということである。生徒の好き嫌いをその方向へ誘導するのは、文学教室での国語教員の役割ではないか。

後ほど触れるが、「語りの構造」が多くの研究者に重視されているが、しかし、それは「語りの構造」ではなく、「語られた内容の構造」、つまりバルト1期の言っている「物語の構造」ではないか。「語り」は殆ど物語、いわば語られた結果として理解されている。それについて、たとえば坂部恵『語り—物語の文法』を見れば分かる。野家啓一は鹿島徹からの批判を受け入れて、「物語 (story) の代わりに、「物語り (narrative)」を使ったという逸話のようなことが『歴史の哲学』の「増補新版へのあとがき」に記されている。それは恐らく、新歴史主義、ナラトロジーに影響を受けたことと思われる。しかし、田中実が指摘したように、ナラトロジーをもって物語が読めるが、〈近代小説〉が読めない。「まとめ2」にまた書くが、〈近代小説〉の〈語り手〉はよく読者に語る主体の位相を読ませるために仕掛けをあちこち配置している。〈作家〉自身が読者の読みをリードするのが、〈近代小説〉の特徴である。

よく考えてみれば、今現在、文学研究ではなく、文学教育のほうはこれまでの文学研究における理論受容にたいしての反省を迫っているのではないか。昨今の文学研究は、理論受容における問題を反省するよりも、むしろ次々に舶来される新しい理論に飛びつく。あたかも、新しい理論を使いこなせるかどうかということは文学研究を測る基準とされているようである。

ある意味で、昨今の文学研究の枠組みのなかで、これまでの文学研究における理論受容に対しての反省は不可能である。文学教育では、読む行為の問題を避けることができないので、そのような反省が可能なのである。つまり、出口は新しい理論ではなく、新しい世界観認識に関わっている、ということである。

そのために、本章では、本研究の前半を纏めるつもりで、次の二つの問題に取り組んでみたい。一つは、文学研究における理論受容においては、長い間、ソシュールの言語学がフランスの構造主義に影響を与えた、いわばソシュールは構造主義の草分けという説が流布されている。それについては、すでに松澤和宏からの批判があるが、しかし、本研究からみると、そのような説を斥ける理由はソシュールの言語学に秘められている

世界観認識に関わっている。それについて、具体的にソシュールの「ホイットニー追悼論文のためのノート」を通して分析できる。

もう一つは、ポストモダンと闘う二つの方向。それを示すために、この章では、座談会「文学と教育における公共性の問題-文学教育の根拠」を取り上げて、モダンからポストモダンを批判する松澤和宏と、ポスト・ポストモダンからポストモダンを批判する難波博孝の相違を明らかにしてみたい。

第七章 〈近代小説〉におけるエクリチュールと主体 —森鷗外の『舞姫』と『雁』

「言語論的転回」以後、エクリチュールは、そのまま書かれたものとして理解すればいいのか。また、「作者の死」が宣告されている以上、主体のことが語りうるのかと疑われるかもしれないが、しかし、それはあくまでもポストモダンの文学研究の枠組みである。ポストモダンを超えるには、主体のあらためての召還、他者を認め、自己否定を内包する書く行為のある近代小説が求められる。それは田中実に定義されている〈近代小説〉の特徴である。それを明らかにするために、この章では、バルトの書こうとする「小説」と絡めて、安藤宏の〈表現機構〉と田中実の〈第三項〉を鷗外の『舞姫』、『雁』という具体的な小説についての読みを通して比較する。

第八章 〈近代小説〉における〈語り手をこえるもの〉とは何か —魯迅の『故郷』

魯迅の『故郷』は日中両国の文学教室で半世紀以上読まれた名作である。この章の前半では、『故郷』をめぐる藤井省三と田中実の読みを比較検討し、世界観認識の違いが「読み方」に決定的な違いをもたらすことについて論じる。田中実によって展開されている〈第三項〉論は「語ることの虚偽」との闘いを内包しており、それによって〈近代小説〉を〈近代の物語文学〉から峻別できる。『故郷』の場合は、〈語り手〉の「私」を相対化する〈語り手をこえるもの〉を読者が構造化することが必須である。また、〈第三項〉論の方向性はテキスト概念の提起以後、さらに転換していたバルト思想の発展方向に極めて近いと思われる。そのため、この章の後半では『明るい部屋』というバルトの最後の著作を取り上げて、田中実との間にある相同性についても論じる。

第九章 文学の再生のための、ポストモダンに抵抗する二つの方向 —芥川龍之介の『羅生門』

これまで流行っていたポストモダン文学理論およびそれに駆使された方法論を超えるために、そもそも理論を受容する時、原理的研究およびそれによって齎された「世界像の転換」を考える必要がある。それを抜きにするかぎり、理論の受容は結局丸山真男の言っているように、「あゝあれか」で終わり、理論に対しての「過敏症と不感症が逆説的に結合する」こと

になってしまうおそれがある。いうまでもなく、近代以後の日本では理論の牙が取られたのはバルトのテキスト概念だけではない。

二〇世紀八〇年代以後の文学研究の新地平を切り拓くために、生成論に期待できるところが多いが、しかし従来の文献学との絆を断つこと、認識論上の究明がその前提とされている。生成論によって導かれるのは、まさに書く行為そのものの豊饒な世界であるが、しかしそこで世界観認識が問われたり「世界像の転換」が引き起こされたりするかどうかは松澤和宏の生成論と田中実の〈近代小説〉研究の決定的な相違点である。

そのために、本章の前半では、松澤和宏にリードされている「生成論研究」について整理する。その上で、松澤はどのような文脈のなかで「作者」、「書き手」を使ったのか、ということについて検討してみたい。本章の後半では、芥川龍之介の『羅生門』をめぐって、松澤和宏の読みと第三項理論に基づいての読みを比較する。

第十章 〈テキスト論〉の終わり、第三項理論の始まり —三島由紀夫の『美神』

本章はほぼ十年前、行なわれた座談会「〈国語教育〉とテキスト論」を批判的に読み直して、〈テキスト論〉と第三項理論の対立を突き詰めてみたい。その上で、三島由紀夫の『美神』をめぐって、〈テキスト論〉を標榜する高木信の読みと、第三項理論に基づいての読みを比較してみたい。

バルトⅡ期に乗れなかった〈テキスト論〉はデリダの脱構築に乗れるはずはない。バルトのテキスト概念および脱構築の「深層」を照らされるのは〈テキスト論〉ではなく、第三項理論であるということについて、デリダの『声と現象』を通して考察してみたい。なお、理論上の対立が具体的にどのような読みの実践に反映されているのかということについて、論の途中で三島由紀夫の『美神』と絡んで分析してみたい。

今日、われわれは第三項理論と〈テキスト論〉の対立をクリアするのが急務である。そうしなければ、たとえば、理論が退潮した後、現れてきたトドロフの教育論を的確に捉える基準は簡単に見つからない。これから改めて論じる予定であるが、第三項理論論を基準にすれば、『文学が脅かされている』のなかで文学理論に対してのトドロフの批判はバルトたちの文学理論からの退行であり、文学のためにはならないと言わざるを得ない。

第十一章 ロラン・バルトの「作者の死」から村上春樹の「神話の再創成」への思想地平 —宮澤賢治の「注文の多い料理店」と夏目漱石『夢十夜』「第六夜」

これまで、一時に構造主義に駆使されている人文学の研究では、主体のことを強調することがタブーとされているが、それを克服して、新たな主体の作り方を見せてくれたのはポスト構造主義である。その文脈のなかで、たとえば、‘not being egotistic but accepting that

you have to be egoistic' (『小説の準備』英訳からの引用) という最晩年のバルトの辿り着いたパラドックスが理解されるべきである。このパラドックスは基本的に、バルト自身に引用されたニーチェの「あるがままの君になれ」、カフカの「おまえを破壊せよ……あるがままのおまえに変われるように」に通じている。複数の「あるがままの君」も、アーレントの「公共性」に狙われている方向であろう。バルト、アーレントたちの思想に説明されるのは、時代と対抗できる「主体の構築」とは何かということである。

その一方、村上春樹の「神話の再創成」は時代のみならず、「大東亜共栄圏」などの神話と対抗できるものである。そのために、村上春樹の次のような発言を重視すべきである。「僕がやりたかったことは、文芸システム言語みたいなものを一回全部洗い流し、もう一回、日本語の言葉を立ち上げて、新しい文学の言葉みたいなものを作っていくことでした」(「村上さん 村上文学を語る 物語、神話につながる」、『毎日新聞』2005・5・1、聴き手は小山鉄郎)。村上春樹の「神話の再創成」を説明することができるのは「新しい文学」である。そこから、引き続けて考えなければならないのは、「文学」の言葉とは何かという問題である。

「神話の再創成」は例えばバルトの「作者の死」以後に位置づけられる。村上春樹の「神話の再創成」およびそれに示されている「新しい文学」を説明するために、われわれはまずこれまでの文学研究におけるバルト受容という問題をクリアしなければならない。そのために、本章では具体的に中村三春の文学研究を取り上げて論じてみたい。今日、バルトの文学理論をよく言及しながら、しかも具体的な作品論を行なう文学研究者の代表として挙げられるのは中村三春である。

本章の前半では、中村三春はどのようにバルトの理論を受容したのか、果たしてバルトⅡ期と対峙できたのかということを検証してみたい。バルトⅡ期を通過できれば、「新しい文学」とは何かということがわかる。たとえば、バルトⅢ期の世界観認識を前提にして書かれた宮澤賢治の「注文の多い料理店」と夏目漱石『夢十夜』「第六夜」は「新しい文学」の代表として見なされる。これらの「新しい文学」にどのような読み方が求められるのか、後半では、中村三春の読みと比較しながら明らかにしてみたい。

《神》がわれわれの捉えられる世界の外部にあり、われわれの捉えられる世界が《神》に捉え返されるのがアーレントの「物語」であり、夏目漱石、宮澤賢治および村上春樹の「小説」である。近代以後の「正解が複数である」という発想に由来している「神々の闘い」においては《神》が不在である。いうまでもなく、《神》は正解の象徴ではない。《神》は「善悪の彼岸」にある。そのために、「神々の闘い」の神(=正解)が死ななければならない。ニーチェの「神が死んでいる」の神は複数であり、村上春樹の「神話の再創成」の神話(神)が単数である。村上春樹の『風の歌を聴け』の風は宮澤賢治の『風の又三郎』のなどの「小説」の風は宇宙(『注文の多い料理店』の「だいぶの山奥」の奥は宇宙である、そこから「小

説」が語られている。繋がられない物語が繋がっている) ということから吹いてくるものである。

第十二章 (まとめ2) 〈語り〉において交差している文学研究と文学教育

筆者の文学研究は田中実の『小説の力』に出会って始まったが、長い間、田中実のように小説を読むことができなかった。小説が読めなかった理由は、やはり、小説とは何か、あるいは文学とは何かということが分からなかったからである。私は、たまたまベンヤミン、バルト、アーレント、ラクー＝ラバルトなどの思想家の思想を読んで、文学研究は「文学」についての定義から始まらなければならないと悟った。

そこで、読む行為・書く行為・語る行為の原理が分析の対象とされている。つまり、読者にとって、読まれる対象とは何か、作家にとって、書かれる対象とは何か、語り手にとって、語られる対象とは何かということである。小中高の文学教室は、基本的に生徒たちの読みがあってから成り立つのである。そこで、国語教員にとって、自分の読みを生徒に提示しながら、真摯に生徒たちの読みを受け止めるのが重要なことであろう。文学教室で読みと読みのぶつかることは、当たり前のように見えるが、しかし問題はそんなに簡単ではない。複数の読みが一つの読みに回収されることを認めないので、複数の読みをそのまま容認させても果たしていいのか。これまでの半世紀、ポストモダン思想はそのために闘っていたが、結局、出口は見つからず、それに影響を受けた文学研究は文献学へと退行しているか、混濁がいつそう深まりつつあるように見える。

文学教育側からみると、信じられないことかもしれないが、ポストモダン思想、あるいはそれに影響を受けた文学研究の出口は、複数の読みがぶつかる文学教室にある。それは、筆者自身にとって文学研究のために、しばらく文学研究(の主流)から離れて、文学教育をかくぐる所以である。

本研究の前半では、ポストモダンを通過した後のポスト・ポストモダン思想地平を築くのは第三項理論のような世界観認識であるということが論じられた。第三項理論に基づいて、「文学」についての再定義ができる。このような「文学」に求められる読み方を示すために、これまでの五章(第7章から第11章まで)で、森鷗外、夏目漱石、魯迅、三島由紀夫、芥川龍之介、宮澤賢治および村上春樹の〈近代小説〉を分析してみた。また、「文学」に求められる読み方で読むと読まないとの相違を明らかにするために、今現在の文学研究をリードする安藤宏、中村三春たちの読みを取り上げて分析した。

ポスト・ポストモダン思想を理解するには、ポスト構造主義とされた思想家だけではなく、ソシュールの言語学、フッサールの現象学に拡げる必要があるし、第三項理論に基づいて定義された「文学」に求められる読み方を〈近代小説〉だけではなく、俳句、詩歌、ラカンの

精神分析、老子の哲学などにも応用できるのである。それについては、今後の課題として引き続けて研究してみたい。再出発のために、もう一度、田中実の『小説の力』に立ち戻るのが、今現在の筆者の心境である。